

歴史的トラウマ論の射程と日本におけるソーシャルワークの再構築 ー脱植民地主義的視座からの試論ー

○明治学院大学 宮崎 理 (008539)

キーワード：歴史的トラウマ、ソーシャルワーク、植民地主義

1. 研究目的

本報告は、歴史的トラウマ論の知見を手がかりに、日本のソーシャルワークを批判的に再構築するための視座の一端を探る試論である。歴史的トラウマ(historical trauma)は、植民地支配、奴隷制、戦争、ジェノサイド、大規模災害などといった過去の悲惨な出来事の記憶が世代を超えて人びとの生活と人生、関係性に影響を与える現象を捉える概念であり、国際的には脱植民地主義的な問題関心と深く結びついて議論が展開されてきた。

一方、日本のソーシャルワークでは、歴史的暴力や植民地主義的遺産との向き合いが十分になされてこなかったという課題がある。本報告は、歴史的トラウマ論をソーシャルワークの批判的再構築に向けた理論的資源として捉え直し、日本のソーシャルワークにおける脱植民地主義的議論の展開に向けた理論的足場を提示することを目的とする。本報告では、まず、歴史的トラウマ論の起源とその変遷を概観したうえで、先住民族や移民的・難民的背景を持つ人びとの(への)実践と交錯する国際的な議論の射程を明らかにする。さらに、それらの議論を、日本の歴史的文脈やマイノリティと連帯することを志向するソーシャルワークと接続する可能性を探る。

2. 研究の視点および方法

本研究は、以下の二つの視点を軸に据えている。第一に、歴史的トラウマ論を単なる心理的ケアの枠組みとしてではなく、植民地主義の歴史を可視化し、制度化された抑圧を問い直す批判的理論として捉える視点である。この立場から、歴史的トラウマ論がどのように展開されてきたかを理論的に整理する。

第二に、それらの議論を日本におけるソーシャルワークの文脈に接続するために、植民地主義的遺産の痕跡や抑圧の不可視化の構造を批判的に検討する視点を導入する。具体的には、植民地主義と戦後福祉国家形成の関係などを視野に入れつつ、既存の日本のソーシャルワークにおける言説的傾向や理論的空白を分析対象とする。

方法としては、文献研究および批判的理論分析を主たる手法とし、歴史的トラウマ論の展開とそれに関する社会的実践に注目する。また、日本におけるマイノリティに対する実践や言説において、いかなる歴史的沈黙が存在しているのかについて理論的検討を行う。

3. 倫理的配慮

本報告は、日本社会福祉学会の「研究倫理規程」に準拠しており、利益相反はない。

4. 研究結果

本研究では、歴史的トラウマ論、とりわけ Maria Yellow Horse Brave Heart の提起した概念を起点に、トラウマを個人の内面に閉じ込める心理主義的な理解を批判的に再検討した。そのうえで、歴史的トラウマが示しているのは、特定の集団に対する抑圧が世代を超えて連鎖し、社会構造や制度の中に沈殿しているという、抑圧の集団性と歴史性であるという点を重視した。こうした視座は、脱植民地主義の議論と親和性を持ち、反抑圧ソーシャルワークの系譜とも交錯する。歴史的トラウマ論は、癒しや回復のみならず、歴史的抑圧の認識、可視化、そして制度や社会関係の変革を伴う実践的課題を内包している。

日本では、植民地支配の歴史やその責任、あるいは移民的・難民的背景を持つ人びとや先住民族に対する抑圧といった構造的問題が、ソーシャルワークにおける議論の中で十分に位置づけられてこなかった。こうした沈黙は、単なる知識の欠如ではなく、制度的され再生産される中で作動している抑圧のメカニズムであると考えられる。このような歴史的沈黙を掘り起こし批判的に論じることが、日本のソーシャルワークが抱える理論的・実践的空白を明らかにすると同時に、ソーシャルワークの外部に置かれてきたものを視野に入れるための鍵となる。

人びとの具体的な実践を参照すると、植民地支配の犠牲者を悼む各地の営みが示唆するものは大きい。歴史的トラウマ論においては、過去の悲惨な出来事が必ずしも自動的にトラウマとなるわけではなく、犠牲者を悼む儀式やモニュメントの存在が、癒しや回復の過程において重要な役割を果たすことが指摘されてきた。こうした議論をもとに検討すると、追悼の取り組みは、「哀悼可能性 (grievability)」が損なわれることに抗し、不正義に対する責任の「社会的つながりモデル」として機能してきたということが見えてくる。

5. 考察

歴史的トラウマ論を日本におけるソーシャルワークの文脈に導入するにあたっては、単なる心理主義的なモデルとして輸入するにとどまらず、その理論が提起する歴史の政治性、記憶と抑圧の関係、専門職の権力性の問い直しといった核心部分と接続する必要がある。さらにそれは、変革志向のソーシャルワークが重視する「人びととの連帯」の倫理とも共鳴するものであり、脱植民地主義的な理論と実践の可能性を広げる視座として重要な意味を持つ。

日本においても、歴史的沈黙と向き合う必要のある実践の場が存在している。そうした場において、歴史的トラウマ論の視座は、抑圧に抗すること、そしてソーシャルワークという専門性そのものを再定義していく営みへとつながる可能性を有している。

※ 本研究は JSPS 科研費 JP24K05369 の助成を受けたものである。